

堀家が歩んできた歴史

堀家は、江戸時代の1747年から江戸時代の終わりまで、一橋徳川家の庄屋を代々務めていました。また、江戸時代、年貢米などの農業収入のほかに、綿花・菜種などの商売もしていました。



堀家のある日飼村は、江戸時代の初めは、姫路藩がおさめ、1672年～1747年までは、龍野藩の脇坂領となりました。そして、1747年～江戸時代の終わりまでは、一橋徳川家の領地となったのです。1740年代からは、一橋徳川家の領地として世話をしていたり、お金を貸していたりしていたので、武士だけに許された刀を差すことや、名字を名乗ることができるようになったのです。

堀家の今の主屋^{おもや}は、江戸時代の1767年にでき、現在の当主の堀さんは、11代目です。堀家は一橋徳川家からいろいろなことが許されたので、すごいと思いました。市の指定文化財なので、大勢の方々に堀家の歴史や大切さを知ってもらい、たつの市の皆さんといっしょに守っていきたいです。

名字や帯刀が許可される

堀家は龍野城の殿様の村方三役の一つを務めていたのですが、日飼村が1747年一橋徳川家の領地となり、徳川家とつながるようになりました。

堀家が一橋徳川家に貸していたお金を御用金といいます。堀家は、多額のお金を一橋徳川家に貸していました。そのかわり一橋徳川家は、お礼として「堀」という名字を名乗ることや、刀を孫の代まで差してもいいことにしました。しかし、江戸幕府が終わった時、お金を返してもらえませんでした。

幕府が、お金を返さなかったと分かったときは、おかしいと思いました。

庄屋として

1747年、龍野脇坂藩の領地から一橋徳川家の領地となった今の新宮町にある下野田・佐野、龍野町にある島田・日飼・中村・小宅北の六か村の取りまとめ役（庄屋）に堀家の彦左衛門さんが命じられました。

日飼村の庄屋は、江戸時代が終わるまで堀家が務めていました。庄屋は、年貢の取りまとめや、殿様との仲介役などの役割をしていました。殿様が日飼村に何らかの命令すると

きは、一番に庄屋である堀家に行きました。今の堀家には、殿様のような人が客として来たとき、かごをおろしていた石が残っています。

庄屋になったとき、村の人々のためにがんばっていたことや、約200年の間、新右衛門さんから伊三郎さんまで堀家の方が、代々庄屋を引き継いだことを知り、堀家のすごさを感じました。



堀家の^{かわら}瓦の秘密

私たちは、なぜ、瓦に家紋の絵が描いてあるのか疑問を持ちました。家紋の模様は、「向蝶（むかいちょう）」といって、蝶の絵が書いてあるのです。家紋を入れた瓦は特注としてつくられました。

瓦には、瓦を作った年と、作った人の名前が書いてあります。例えば、堀家の主屋の棟の瓦には、明和4（1767年）という年代と三木与兵衛という瓦師の名前が刻まれています。



瓦の種類は、棟にのせる「のし瓦」、棟のはしなどにのせる「鬼瓦」、上半分の「丸瓦」、下半分の「平瓦」、模様をつけた軒先の「軒丸瓦^{のきまるかわら}」、「軒平瓦^{のきひらかわら}」など6種類の瓦が使われています。棟には飾りのついた瓦もはめ込まれています。何枚のかわらが屋根に使われているかについては、数えたことがないので分かりませんでした。

私たちの家は、瓦を使った屋根があるけれど、堀家のような瓦ではありません。昔のかわらのことについては、全然知らなかったので、疑問を解決できて良かったです。これからも、文化財の堀家住宅を大切にしていきたいです。



堀家は、屋根のつくりにも特徴があります。

堀家の道具について

まず、門に入ってすぐ横にあるのは、火事になった時にすぐ消せるように、水を飛ばす雲龍水という道具です。

堀家の建物は木と木を組み合わせてできていて、その部分は、くぎを使っていません。柱に、穴を開けてその穴をあけた中に、別の柱を、さしこんでつくられています。柱は、のみ・かんな・ちょうなでけずっています。たたく道具はげんのうです。使われている木はアカマツの木で、一本のアカマツの木を、そのままけずって、一本の柱に使われています。

私たちは、堀家がいろいろな道具で、作られていたことが分かりました。昔の道具で建てていて、しかも手作業で一つ一つと組み合わせながら建てているので、かなり苦勞したろうなと思いました。



堀家の建物と敷地を紹介

① 部屋について

主屋の建設当時は9部屋で、どんどん増えていきました。今は16部屋あります。9この部屋で68畳ありました。敷地約6400㎡のうちもとの主屋の面積は250㎡です。一つ一つに部屋の名前があります。

入り口の前にあるかべは、船板を使ってできています。船の底板は、水に強くできています。でこぼこしているのは、貝がついたあとだということです。

土間が広く、けむりを出すために天じょうがありません。その屋根を、こし屋根といいます。土間は、土でできています。かたくたたいてできているので、たたきともいいます。「玄関の間」の奥が「次の間」です。その奥が「上の間」といい、上の間は、えらい人しか入れない場所です。



② 庭について

庭の面積は全部で4000㎡あり、庭は、1つではなくいろいろな場所にあります。

主屋の北にも、2500㎡の庭園があります。来客を迎える庭には、かごをおくためのかご石があります。

③ 門について

長さは、5mあります。門の名前は長屋門といいます。



④ 蔵について

主屋のまわりには、蔵がたくさんあります。堀をかねて周りを囲んでいます。なまこがくつついたように白いななめの模様があるかべを「なまこかべ」といいます。



今の家とのちがい

土間が土でできていて、天井はけむりをだすためにこし屋根があるところが、堀家と今の家のちがいだと思いました。部屋の1つ1つに名前がついていることがすごいと思いました。庭が1つだけではないということや庭より家のほうが小さいことにもびっくりしました。私たちは、たくさんの人にもっと堀家住宅のことを知ってもらいたいと思いました。



堀家の綿花の商売

堀家は、村の人に綿花を作らせ、それを売って商売をしていました。土地を貸して作物を作らせることを「小作」といいます。この辺りでは、菜種、綿の生産が行われ、堀家はその取引にかかわるようになったのです。綿花は大阪や神戸に出荷して高く売れていました。堀家は商売が上手だったそうです。

堀家が綿花の取引を昔やっていたことから、わたしたち小宅小学校6年生は、綿花の栽培をしました。夏に花がさいて、予定より早く10月ごろに綿が採れはじめました。その綿をつむいで糸にして、しおりのひもにしました。綿花の栽培としおり作りを通して、綿花づくりや糸つむぎの難しさを学びました。このしおりから、堀家と綿花のかかわりについて知っていただきたいと思います。

..... 古代山陽道



九州までの一本道！

古代山陽道は、奈良時代（646年）にできました。おやけのまちを知る会の皆さんの話によると、今に残る道跡は、中井けやき坂から中村，末政を通る東西の道だそうです。

昔は、都から九州の役所の方までつながっていたそうです。以前は、中村延石道が残っていましたが、今は残っていません。



古代山陽道は、駅と駅の間が短く、山あり、谷あり、川ありで、駅の数が多かったようです。駅は、物の輸送にも利用されていました。

中国や朝鮮などの使者も、この道を通って都にも行っていたそうです。使者に備えてかわらぶきで白壁の駅も建てられました。

おやけのまちを知る会の皆さんの話によるとこの山陽道は、「都からの命令で、国が作った」とのことでした。



菅原道真も通った？

菅原道真も小宅を通ったともいわれています。菅原道真は、平安時代の政治家で、遣唐使廃止を進言して認められた人です。道真は、藤原氏の策略で九州の太宰府に追いやられる途中に昔の小宅の役宅に、泊めてもらえるか依頼していたそうです。

左の写真は、小宅北公民館の横にある天満宮

の天満社改築趣意書(昭和46年)です。おやけのまちを知る会の皆さんによると「『菅公』という言葉が菅原道真のことを表しています。」とのことでした。小宅のまちを知る会の皆さんから、菅原道真についてのなぞを解き明かそうとする熱意が伝わって、私たちががんばろうと思いました。



.....小宅神社.....

歴史ある小宅神社



小宅神社は、まだこの地が漢部^{あやべ}の里と呼ばれていたころ、朝鮮半島から帰る神功皇后^{じんぐうこうごう}からめずらしい奇石をいただき、それを神霊^{しんれい}としてまつるため690年に建てられました。この小宅神社には、神功皇后と応神天皇^{おうじん}（神功皇后の子ども）がまつられています。

江戸時代までは、八幡宮という名前でしたが、1868年（明治元年）3月に小宅神社という名前に変わりました。小宅神社で一番古い石造

物は鳥居です。昔は、参道に松の木がありましたが、戦後になくなってしまいました。鎌倉時代の学習で習った「やぶさめ」も行われていたそうです。私たちは、小宅神社の中で一番古い石造が鳥居だと知り、驚きました。

祭神を守る神



また小宅神社には、神社を守る右大臣と左大臣がいます。左の写真のように、門を入って、右に右大臣、左に左大臣です。右大臣と左大臣は、えらい人を守る姿をしています。右大臣は刀を持って、左大臣は、籠（えびら）を持っているのが特徴です。

私たちは、右大臣と左大臣の顔を見て、守るために、怖い顔をしていると、感じました。右大臣と左大臣には、いつまでも、小宅神社を守っててもらいたいと思います。

くぎのない小宅神社

小宅神社は、くぎを使わず、木を組み合わせながら造られています。おもしろいと思ったことは、木を組み合わせせて造っているというのがおもしろいと思いました。宮司さんに聞いて、感じたことは、現在の建物は、鉄などで造られているけれど、小宅神社は、木で造られているので、「あたたかみがあるなあ」と感じました。「私たちが生まれる前からあったので、これからもずっと、大切に残してほしい」と思いました。なので、ごみを捨てない、小宅神社にあるものにむやみにさわらないなど、自分達がこれから出来る事をやっていきたいと思っています。

切り通しの歴史



奈良時代の国の定めによって、奈良の都から九州まで続く道（山陽道）がけやき坂を通っていました。けやき坂切り通しは、はっきりとは、分からないけれど、おそらく室町時代には、つくられていたと思われます。

現在、切り通しは、中井地区のけやき坂旧トンネルの上にあります。切り通しは、「つち」や「のみ」という道具で石をたたきけずってつくられています。

切り通しの役割は、奈良や九州からの役所の連絡などに使われたり、一般道として使われたりしたそうです。

取材に行って、わたしたちが感じたことは、けやき坂切り通しには、長い歴史があること、昔の人たちのためにちゃんと役割があったことが分かりました。実際行ってみると、写真で見るよりも大きくて、すごいなと思いました。切り通しは、見ただけで通行がたいへんだなと思いました。（右の写真は、明治のころの様子）



との様の道



私たちは、おやけのまちを知る会の皆さんに、いろいろな事を聞いてけやき坂切り通しを調べました。いつできたのか、はっきりしたことは不明です。

江戸時代の参勤交代では、脇坂の殿様も通っていたようです。姫路→切り通し→上富永に続く道のことを「姫路道」と言われていました。そのころの切り通しは、今よりも幅が狭いものでした。現代になるにつれて、少しずつ広げました。

例えばノミでけずったあとが切り通しにあります。また、火薬を使って爆発をさせながら広げました。第二次世界大戦のころまで、切り通しを通り道として使っていた人もいました。

中井廃寺の正式な名

中井廃寺は、旧小宅村中井の字、中垣内にある中井観音堂付近や、字東垣内にある建速神社（荒神さん）にかけての一带から古瓦類がしばしば出土することがきっかけで、古代寺院跡と察知されました。7世紀～8世紀に建っていたということを知ったときは、とてもおどろきました。写真の地図の太い線が建物の広さを表しています。



中井廃寺の名が、「彌勒山本覺寺」ということを知ったときは、とっても難しい名前だなと思いました。現在、その場所は、民家となっています。中井廃寺は、所在地から、中井廃寺と呼んでいるのです。



塔心礎（建物の基礎）



露盤

この写真は、現在、山村家の門先にあつて、その付近から塔の柱の上部にはめこまれていた露盤と塔心礎なのです。これが、伽藍配置復元の手掛かりを残しており、この廃寺は、法隆寺と同じような建て方だった可能性があります。この記事を書いていると、中井廃寺がとても昔に建てられたことが分かりました。

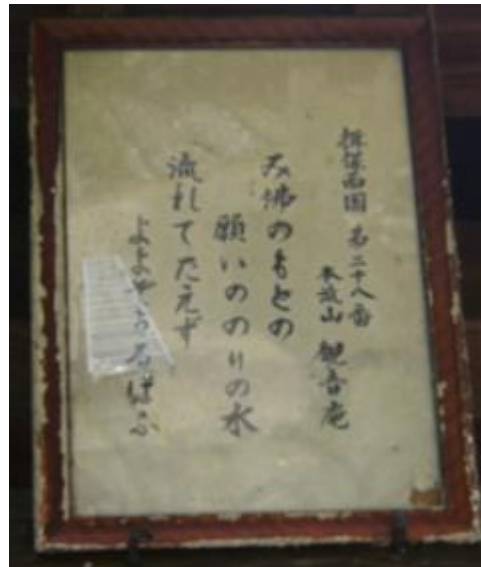
観音堂にまつわる話

中井観音堂には、昔からこのような歌が伝えられています。それは、次のような歌です。

「み^{ほとけ}佛の もとの願いの のりの水 流れて
たえず よよぞうるほふ」

この歌は、額^{がく}に大切にに入れられ、観音堂の正面にかざられていました。いつごろ、だれがつくったのかは不明ですが、観音様からいただいた恵の水に感謝する気持ちがこめられているようです。

私たちは、この歌を聞いて、昔の中井の人が観音様をととても大切にしてい、感謝しながら暮らしていたのだなと感じました。



5月18日の観音堂



中井観音堂では、1年に一度の行事が5月18日に行われます。その行事では、他の日には見るのできない中井十一面観音像を見ることができます。

その日の祭りでは、甘茶が配られています。多くの人がお参りに来られて甘茶を飲んでいきます。今も、多くの人に信じられているのだなと思いました。

中井観音堂の歴史と昔のかわら

中井観音堂は、天長2年(825年)ごろ、すでに建っていました。永正7年(1510年)の兵火により焼失して、その跡に小庵が建ったようです。永正7年(1510)の兵火の際には、まつられている中井十一面観音像は、網干の大覚寺に移されました。

右の写真は観音堂の昔の瓦です。お話を聞かせてくださったおやけのまちを知る会の皆さんは、「今と昔の瓦は、全然ちがう」と言っておられました。

昔の瓦は、固く、じょうぶだそうです。たたくと「キンキン」という固い音がしました。また、今の瓦とはちがって、布の模様がついていました。表と裏があって、模様は、細かい編み目模様でした。瓦には色や模様が異なるものが多く、不思議に思って質問してみると、時代の違いが分かりました。



観音堂の近くには、瓦がまといつて昔瓦を焼いていたあともありました。それが左の写真です。こんな山の中で、瓦が焼かれたんだなあと、びっくりしました。かまの向きは風の向きと関係があることも知りました。昔の人の知恵が分かりました。

中井地区には、右の写真のような道路にまつられる石像がありました。野の神だそうです。歩いていると歴史の重みを感じました。



浦上井堰

昔の浦上井堰



井堰のことを井，農業用水組合を井組と呼んだそうです。左の写真のように、昔は、毎年田植えの前に石をつめた俵で揖保川をせき止める作業をしました。大井といひます。

揖保川の上富永地区の辺りに井組の人達が水田に水を引くため浦上井堰を作りました。

大井づくりには井堰の基礎となる三角の形をした底わくという物を置いて石をつめ、せき止めていました。

井堰は、縦約28m、横100mで大きいなと思ひました。

浦上井堰は、昔の人にとって米作りに重要な役割をしていたのだなと思ひました。



龍野の用水路 浦上井堰

昭和27年に、浦上井堰と岩見井堰が統合し、岩浦井堰が竣工し、水路の管理が楽になりました。

両水路は以前通り地域の中を流れています。田をつくるためのみぞであることの面影が、感じられました。

現在、三木製材所の工場の下を浦上用水の水路があり、浦上用水は以前通りの役割をしています。

おやけのまちを知る会の皆さんは浦上用水をもっと多くの人たちに知ってほしいと、言っておられました。



小学校の近くには、右の写真のような二階建ての農業用水路があります。昔から複雑な水路が大切にされていたことが分かります。

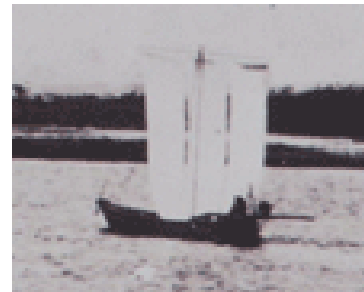


決まりは様石で



石」とも呼ばれています。上の写真には実際に使われた様石が石碑として残っています。この場所には、高瀬舟が止まっていた。様石は、浦上井堰は、6月～10月まで田んぼの必要な時だけ使っていました。

様石は、井堰の高さをきめる石のことです。井組の人が話し合って井堰の高さや位置を決めたのです。井堰は高すぎると水が流れず、下流の井堰が困ります。低すぎると水が田んぼに送れません。だからこの様石はとても大切な石だったのです。「きまり



岩浦井堰（頭首工）とは

浦上井堰と岩見井堰が統合して岩浦井堰になりました。市の文化財堀家住宅の前のくすの木の下にあります。昔は米俵を使って命がけで水の流れを堰止めました。しかし、水争いが起こり、夜中に俵をこわしに来る人がいました。そのため、見張り小屋を作って俵を守りました。



たたみ堤で洪水を防ぐ

揖保川の洪水で、村に被害が出るのを防ぐために堤防をつくることになりました。そのとき必要な時だけ堤防の高さを上げることができるようにたたみ堤が考えられました。たたみ堤とは、洪水がおきそうになると各家からたたみを持ち寄って堤防のかわりにしていました。ふだんは堤防が低いので晴れた日には、揖保川のきれいな景色を見ることができました。



88個の石仏

私たちは、夏休みにしょうたくじ小宅寺に行き、おやけのまちを知る会の皆さんに、小宅寺について、くわしく教えていただきました。そして、見学をしている時に、たくさんの歴史のある物を見たので、それについて紹介します。

山の中を歩いている時に見つけたのがお地藏様で、そのことをくわしく聞いてみると、そのお地藏様は88個あるということでした。いろいろな大きさや、形のちがう石仏があって、おどろきました。



もう一つ見つけたのが、しゃ利塔という建物で、第二次世界大戦で亡くなった方たちの骨が納められているそうです。そして、その前には、花をそえてお参りする場所があります。

また、小宅寺には、播磨龍野藩の第九・十代目の藩主、脇坂安宅・脇坂安斐の墓がありました。そして、小宅寺の入り口にある階段には、脇坂という名字の人の名前がほってある階段石柱がたくさんあ

りました。

弘法大師が . . .

小宅寺は、奈良時代に建てられました。旧小宅寺は、行基が建てたとされています。小宅寺に行く道には、明治時代に建てられた道標みちしるべがあります。そこには、写真のように、弘法大師の石像があるのです。これは、小宅寺までの道標の役割を果たしていたそうです。片山地区へ行くときは、この石をぜひ探して下さいね。



小宅寺には鳥居が

小宅寺には、お寺なのに鳥居があります。それは、昔は、神様と、仏様が、いっしょになっていましたからです。明治時代にわけられたが、まだそのなごりで鳥居があるのです。

石碑の言葉には



片山の東山(金輪山)に調査に行くと、石碑には言葉が書いてありました。その言葉は(左四國八拾八個所)、(右姫路)です。その意味は、昔、宮川から片山へ入った所に二本の道標みちしるべがありました。古い道標みちしるべには(右ひめじ道)(左むら道)とあり、新しい道標みちしるべは(右ひめじ道)(左大師山)とあったそうです。

小宅寺では 17 代目の住職である證然さんが明治 20 年代から寺の裏山に四国霊場 88 か所の

建設にとりかかりました。これは、18 代目の住職である證覚さんの時の明治 35 (1902) 年 4 月に完成したのです。

この霊場のことを大師山と呼び、石碑はその道標みちしるべなのです。

旗ふり台

私たちは、旗ふり台が何のためにあるのか不思議に思ったので調べてみました。旗ふり台は、東山の上にあって大阪から広島までたったの 40 分で肥後米などの価格をたつのを



の 40 分で伝わるなんてとてもすごいと思いました。旗は、短距離には黒・長距離には白・大きさは、大きいものでたたみ半じょう分もありました。受信側は、遠眼鏡を使っていたとあります。大正 6 (1917) 年まであったそうです。

不思議な水

4月21日、8月21日に、大師堂で弘法大師こうぼうだいしのお祭りをしています。四国八十八カ所の、靈山寺りょうぜんじお寺のご詠歌が伝わっているとされているそうです。

大師堂では、毎日、参拝客が訪れ、熱心にお参りされているそうです。

目が不自由な人がお参りをし、そこにあった井戸水で目を洗うとよくなるといわれていたそうです。その事で、私は目が不自由な人が目を洗うとよくなることが、不思議に思いました。



火事！焼失をまぬがれた仏像



上富永大師堂は、時期は不明ですが、火事にあつたそうです。けれど、ご本像は焼失をまぬがれました。しかし、真っ黒になってしまいました。この像は、四国八十八カ所参りの一番目の寺と関係があります。その記録が、ご本像の裏に「りょう山寺」と、残っています。有名なお仏像で、参られる方は水を

使う商売をされている方が多いそうです。揖保川の向かい側の龍野川西地区には、水神町があります。そこの方々が、毎日旭橋をわたってお参りにこられています。

4月8日には、花祭りがあり、甘茶を飲んでいました。せんべいなどのおかしをお供えて、それを、参拝の人々に配っていたそうです。

昔は、橋がありませんでしたが、明治になって、橋がかけられました。これからもたくさんの方が参られたらいいなと思いました。

.....旭橋.....

旭橋のうつりかわり



揖保川をはさんで龍野町にむかって明治時代の中頃に架けられた橋を上ノ橋（朝草橋）と呼んでいました。その後、洪水によって流失することもありましたが、明治35年（1902年）に架けられて、朝日橋として完成しました。さらに、写真のように、大正5年（1916年）に新しく架けかえられましたが、昭和32年（1957年）には事情で廃止になりそうでした。

しかし、地域の強い要望で橋が架けられ、旭橋となったのです。

昭和47年（1972年）に現在のような人道専用の丈の高い鉄製の橋となりました。

朝日橋から旭橋へ

江戸時代以前から、龍野古城には殿様が住んでいました。その殿様は、揖保川には「橋を架けるな」と命令していました。そのわけは、敵にせめられにくいようにするために橋を架けなかったのです。そのため人々は、渡し船でわたったそうです。しかし、城下町の人々は、橋がないと「あまりにも通行が不便だ」という声が多かったので、取り外せる橋ができたのです。

大水により、橋は流され、再度造り直されたそうです。当時朝日橋のことを「上の橋」「朝草橋」と呼んでいました。明治35年「朝日橋」となりました。大正5年にかけてかえをして、昭和32年にまたかけかえをしました。旭橋となりました。昭和47年に今の人道専用の鉄の橋となりました。このことを考えて、昔は不便だったけど今では橋がいっぱいできて、自動車も通ることができて、となりの町に行くことができ、便利なまちになったなということがよく分かりました。



・・・・・・・・・・地区の由来・・・・・・・・・・

地区名の由来

みなさんは、小宅の地区名について、考えたことがありますか？ 5つほど、紹介していきます。一つ目は、宮脇です。宮脇は、小宅神社脇の村だったためです。二つ目は、中村です。中村は、小宅庄の多くの村の中で中心機能を持った村だったためです。三つ目は、富永です。富永は昔、北から日飼町村、その南を四箇町村、その西を川向村などと呼ばれました。明治になって富永となりあまりに大きいので、自治会区分として上富永、富永一丁目、二丁目、三丁目、四丁目の区分呼称ができたものです。四つ



目は、末政です。末政は揖保川の水路が林田川に流水する所、川の行き止まりの真砂の地のためです。五つ目は、島田です。島田は揖保川左岸の中洲を利用してできたためです。

これらの地区名は、江戸時代・明治時代に、村人達などにより呼称されたものだそうです。江戸時代や明治時代に考えられた地区名が今もあることに驚きました。

消えた北村の名は

皆さんは、さまざまな理由で消えてしまった小宅にあった地区名を知っていますか？ 今から一つ紹介したいと思います。それは龍野町北村という地区名がありました。この北村の由来は、「段（段丘自然堤防の略）の川縁の村に集落があったことから、段村（きだむら）が北村（かわべり）に変化したのではないか」ということです。



地区名発見！

1600年ほど前から地区名が決まりました。日飼は昔、洪水などの被害が多くて、日害になり、そこから日飼となりました。

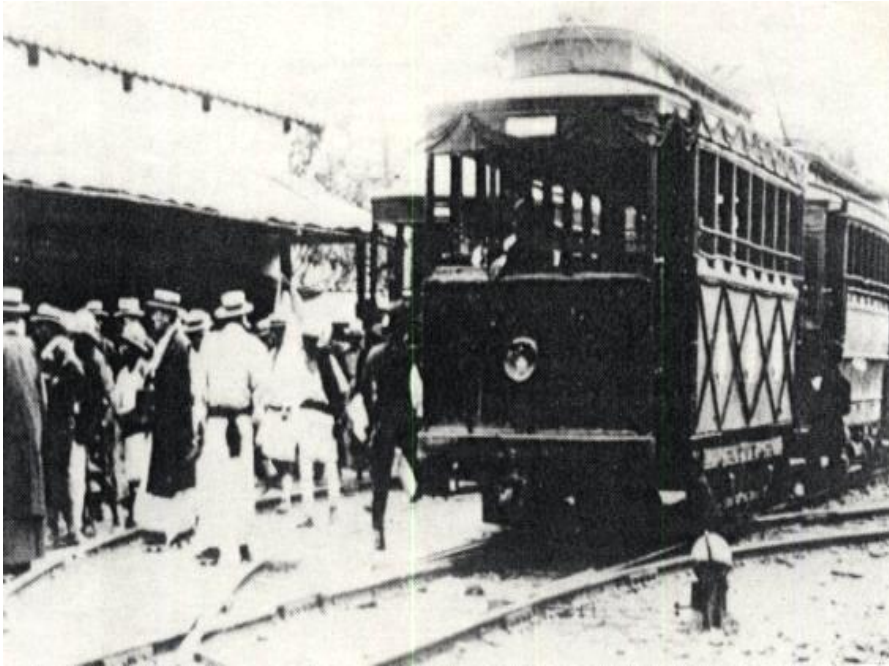
堂本には、昔お城（城主は八木氏）がありました。でも、それは、ふつうの家より、少し大きいほどのお城でした。そのお城がきっかけだそうです。

片山は、山の片側に人が、住んでいたのが片山になりました。片山は昔から片山でした。

大道は、筑紫大道ちくしおおみちが通っていたことから大道になりました。

中井は、川の中にあったから、中井になりました。

播電の意外な秘密



明治42年に誕生し、網干駅から龍野駅まで人や荷物を乗せて、一生けん命に走っていました。当時の金額は、1駅間1銭で、1円よりも安い金額でした。兵庫県揖保郡網干町（現、姫路市網干区）の網干港から、山陽本線網干駅を経

て、揖保郡新宮町（現、たつの市新宮町）新宮駅までの17kmを結びました。昭和9年に播電は廃止されてしまいました。廃止前は、網干駅から竜野駅の間は19銭で運行しており、網干港から新宮の間は51銭でした。このように、播電鉄道で、かかるお金のほとんどの単位は「銭」だったということに気づきました。私達は播電のことをもっとくわしく知りたいと思います。

播電の始まりと終わり

播電の正式名は、「播州電気鉄道」といいます。播電は、明治42（1909）年に誕生しました。網干・新宮間を1時間20分で走り、1日11便運行し、年間延べ95万人の乗客を運ぶようになりました。

しかし、昭和9年に廃止になりました。理由は、姫津線（今の姫新線）ができたからです。姫津線は姫路までつながっていたことで、今まで播電に乗っていた客が、姫津線にとられてしまったからです。

播電はなくなってしまったけれど、今でも播電が走っていた電車道が残っています。この電車道を忘れないようにしたいです。



もとは姫津線



姫津線本龍野野

昭和6年ごろは姫新線ではなく、姫津線でした。姫路から津山までつながっていたからです。その後、新見までつながったため姫新線となりました。写真は、昭和六年頃の本竜野駅の様子です。蒸気機関車が止ま

っていることがわかります。当時の様子を地域のおじいさんに聞きました。おじいさんによると「西側に川があり、その向こう側にすすきがじゅうたんのよう広がってきれいでした。夜になるとほたるが飛んで何ともいえないくらいきれいだった。」と、言っておられました。昼には、「農家の人たちは田んぼに手でいねを植えていた」と言っていました。私たちもその時代に行ってみたくなりました。

荷物運びの姫新線

私たちは本竜野駅の駅員さんや売店のの人に取材しました。昭和56年ごろと今のちがいを調べました。昭和56年ごろでは、貨物などを運ぶための専用列車が走っていました。今では、人が乗るための車両だけとなりました。車両の数は、昔は6～7両あったのが今では乗客も少なくなり1～2両になりました。おやけのまちを知る会の皆さんから、「昔は、まくら木が木で出来ていていたけれど、今は、コンクリートのほうが丈夫なので、コンクリート製のまくら木になりました。」ということを教えていただきました。

減っていく利用者数

昭和40年の姫路駅から上月駅の間での利用者数は、1年間に約590万人も乗っていましたが、今はなんと利用者数が半分に減っています。このことを、おやけのまちを知る会の皆さんは「利用者数が年々減っているの、姫新線に乗る人が増えてほしいですね。」と言っていました。ぼくたちの願いも、昭和40年の約590万人と同じぐらい姫新線に乗る人が増えてほしいことです。

年間利用者数が減ってしまったのは、昭和50年の中国自動車道等の開通や、自動車に乗って仕事に通勤する人が増えたことです。そして、田舎に住んでいた人々が町のマンションやアパートなどに住んで生活するようになったことも原因の一つだそうです。

.....本竜野駅前通り.....

牛が運んだ川原の土砂

昭和初期本竜野駅前周辺に住んでいた人たちは、駅前に店をたくさん開いていて大変にぎわっていました。駅前道路は昭和6年（1931年）に開通しました。道路づくりは、姫津線線路、本竜野駅と同時に行われました。川原から土砂（川石・砂）を駅前通りにトロッコレールを作ってトロッコを牛に引かせて運ばせました。盛土はちゃんと整えて道路にしました。昭和40年ごろ映画館ができ、昭和50年ごろまで続いていました。

これを見て私達が思ったことは、いつも利用している道路は昔の人の苦労があって、みんなが利用できているんだなあと思いました。



昔の駅前通りの店

昔の駅前には、今はあまり見ない約40の店がありました。特に多かったのが、自転車預かりで、運送屋、八百屋、呉服屋、薬屋、写真屋などがありました。

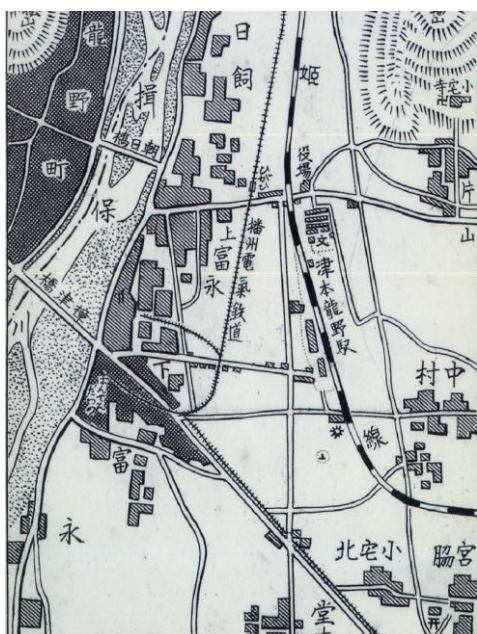
駅の周りには、40軒ほどの店がありましたが、今は少なくなっているので「今も昔のようににぎやかになってほしい。」という人もいました。

..... 本竜野駅

今に残る本竜野駅



昭和6年（1931年）に、姫路から東鶯崎駅間が開業しました。昭和11年（1936年）には、姫路から新見間がつながり、姫新線になりました。昭和46年（1971年）には、蒸気機関車C58が最後の運転になりました。



左の写真は、姫津線と播州電気鉄道があったころの地図です。乗客数が姫津線の方が多かったため、播州電気鉄道は廃線となりました。



平成8年までの本竜野駅です。

列車の中に郵便車！？

昔、本竜野駅では、駅員さんが、ふみ切り（しゃだんき）を、手動で毎回毎回、上げていました。列車が来るたびに、ガッシャンガッシャン上げたり下げたりして、とっても大変だと思いました。昔の本竜野駅は、働いている人が18人いたけれど、今は機械がよくなって新しい本竜野駅には3～4人ほどしかいません。

私たちがおもしろいと感じたことは、列車の最後の車両に郵便車があり、その中で手紙の仕分けをしていたことでした。

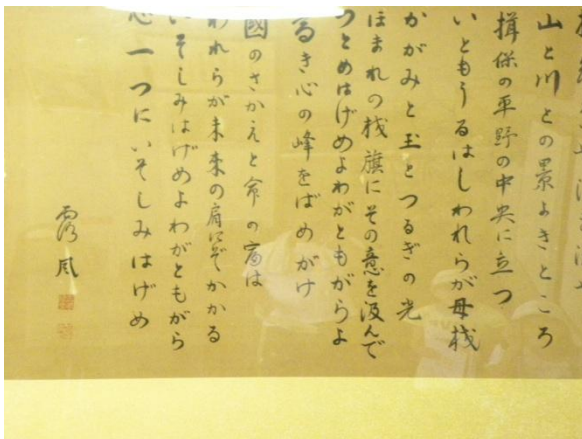
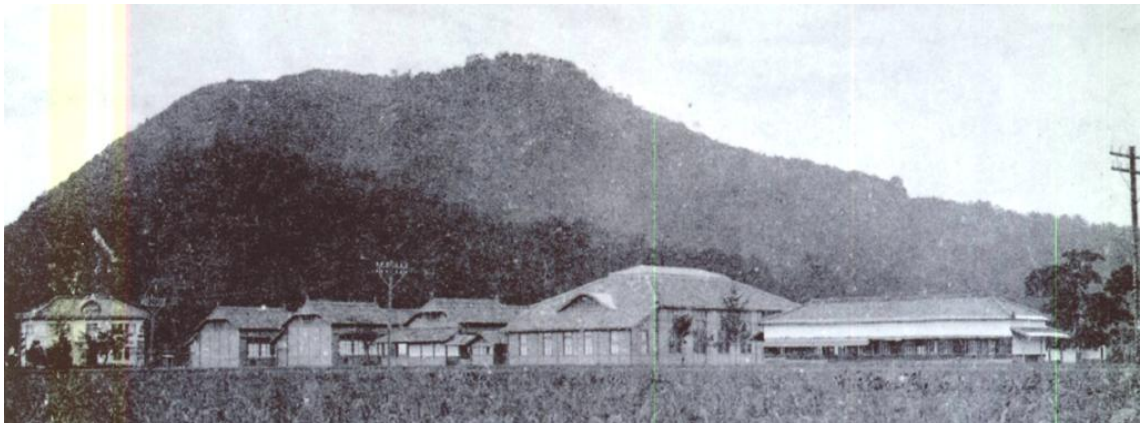
・・・・・・・・小宅小学校・・・・・・・・

権現山をくずし、校庭が

明治45年、水難が少なく安全な権現山という山をくずし校庭ができました。なぜ、運動場を広くしたのかというと、みんなに勉強してもらおうためという住民の願いがあったからです。運動場の真ん中には、4本の梅檀の木がありました。「梅檀は二葉よりかんばし」という言葉から梅檀の木に、子供の将来を期待して、植えたそうです。また、通学路は、通学の便を考え、まっすぐに作られました。そのために、学校の近くの道もまっすぐにつくってあります。おやけのまちを知る会の皆さんの話によると、「昔は、この運動場の広さは、二分の一ぐらいだった。」とおっしゃっていました。私たちは「そんなにせまかったの!？」とおどろきました。

運動場にある二宮金次郎と田中銀次郎の銅像は、戦争により鉄砲の玉用の原料として使われました。でも、戦争が終わり、小宅小学校には銅像が帰ってきました。地域の方のおかげです。

昔から、小宅小学校の子どもたちは、地域の方に大切にされていることを知り、とてもうれしい気持ちになりました。



上の写真は、昭和初期の小宅小学校の様子です。左の写真は、小宅小学校の校歌です。これは三木露風の作詞です。昔から変わらない小宅のほこりです、